

木と向き合い、未来をつくる

白垣木材株式会社

代表取締役 岸 弘之さん

住所：〒831-0011
大川市下白垣156-2
TEL：0944-8812209
FAX：0944-8812210

今回の夢追い人は白垣木材株式会社の岸 弘之さんにお話を伺いました。白垣木材(株)は昭和24年に創業された木材の卸売業者であり、祖父、父と受け継がれ、岸さんは三代目だそうです。

改めて事業内容を教えてください。

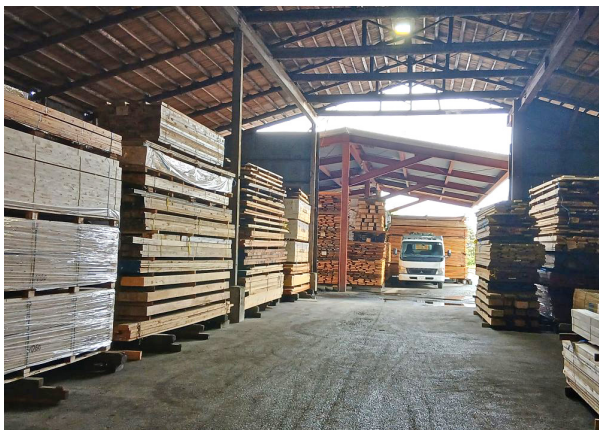
「別注家具店や建具店、工務店に向けて、国産材と輸入材の両方を取り扱っています。取引先は大川市内の事業所様に限らず、北部九州エリアを中心に広がっています。取り扱っている材種ですが、国産材ではスギやヒノキが中心です。輸入材については北米産の針葉樹・広葉樹をはじめ、東南アジアやアフリカからの木材も取り扱っています。具

体的には、北米の針葉樹ではミツガヤバルサムファー、広葉樹ではオークやホワイトアッシュなどです。また、東南アジアからはメラピーやペンスルシダー、家具用の芯材、アフリカからはアユースなども仕入れています。現状としては輸入材の割合の方がやや多く、主に家具用や建築用の材料としてご利用いただいています。仕入れ形態については、丸太での仕入れと板材での仕入れの両方に対応しております、お客様の用途やご要望に応じて柔軟に対応しています。」

幅広い木材を取り扱ってありますが、その中で白垣木材の特徴や強みを教えてください。

「白垣木材の特徴としては、多品種・小ロットに対応している点が挙げられます。既存の在庫を一律に販売するというよりも、ご注文をいただく都度、お客様のニーズに合わせて最適な材料を調達するスタイルですね。近年では加工品の需要が高まっていることもあり、材料としての供給だけでなく、市内の加工業者さんのご協力を得て、半製品の形で納品にも対応している点も特徴です。塗装の直前段階まで加工を施し、カンナ掛けやサイズカットなどを行った状態でお届けしています。事業所様の手間を少しでも軽減し、現場での作業効率向上につながるよう心がけています。」





倉庫内の様子

現在、木材業界を取り巻く環境はどのように変化しているのでしょうか。
「ここ数年は、コロナ禍やいわゆるウッドショック、さらには円安の影響もあって、先が読みにくい状況が続いていて正直なところ非常に大変だと感じています。木材の価格高騰や供給面での不安も続いています、これは木材業界に限らず、どの業界でも同じような状況ではないかと思えます。特に円安の影響は大きく、輸入材の仕入れコストが大幅に上昇しています。国産材に関



加工部材例

しては、日本の森林資源は比較的豊富だとは思いますが、近年、杉材等の輸出が増えてきていて、この動きが過度に進みすぎると将来的に資源の枯渇につながる懸念もありますし、過度な伐採は洪水などの災害リスクを高める要因にもなりかねないです。とにかく先行きが不透明で、今後世の中がどう動いていくのか予測が難しいですね。安定して材料を調達できるのか、また価格面をどこまで抑えられるのかといった点についても、常に気を配りながら事業を進めているところです。」

先行きが不透明な状況の中

で、日々お客様と向き合う上で大切にされていることは何でしょうか？
「お客様の心配事を自分ごととして捉えることです。ご注文をいただいた際に、お客様が今どんなことで悩まれているのか、何に不安を感じているのか、一緒に考えるようにしています。そのためにもできるだけ詳しくヒアリングを行います。その中で、自分なりに情報を整理し、完成形のイメージをお客様と共有することを大切にしています。そうしていくうちに、お客様の心配事がそのまま自分の心配事になっていきます。あとは、その課題を解決する

ために自分自身がどう動くかということに全力で向き合います。これまで経験のない依頼であっても、できる限りお断りせずに引き受けるようにしています。引き受けることでノウハウが蓄積され、経験として積み重なっていきますし、次に同じようなご相談をいただいた際に、より良い形でお応えできると思います。」

家業を継ぐという想いは、元々お持ちだったのでしょか。

「幼少期からよく会社に連れて行ってもらうだったので、物心がついた頃には自然と『いずれは家業を継ぐものだな』という意識がありましたね。祖父や父が仕事に向き合う姿をずっと見てきて、とても立派な仕事だと感じていましたし、憧れの気持ちも強かったですね。そういう思いから、家業を継ぐというのはごく自然な流れでした。高校や大学ではあえて木材とは異なる分野を学び、できるだけ幅広い知識を身につけることを意識してきました。その経験が、今の仕事にも少しずつ活かしていると感じています。」

常にお客様の立場にたつて仕事に向き合う岸さん。そんな岸さんの夢は何でしょうか。
「家業に入る前は、岐阜県の森林組合に勤めていました。そこで造林の実務を経験し、草刈りや枝打ち、伐採など森林の手入れに携わる中で、木を育てる現場の大切さや手間の大きさを実感しました。こうした経験を活かし、今後は造林事業にも関わってきたいと考えています。これまでは木材を「使う」側の意識が中心でしたが、これからは「生産する」視点も大切にしていきたいと思っています。造林は、木を植えて育てる未来につながる仕事です。現場では若い担い手が少ないという課題もありますが、木材事業を継続しながら、余力があれば造林にも取り組み、出資なども含めて関わり続けていきたいと考えています。最終的には、木材の持続可能な社会の実現を目指すとともに、国産材の利用比率を少しでも高めていきたいです。国産材の利用が増えることで、輸送負担の軽減や環境面でのメリットも大きいと感じます。今後も自分なりの形で林業に関わっていければと思っています。」